第５波における医療提供体制（方向性）

第５波の傾向として、ワクチン接種の効果により、入院患者の低年齢化が進んでおり、従来の重症化した高齢者への対応からワクチン未接種の比較的若い世代への対策へとシフトが求められる。

自宅・宿泊療養

自宅療養者に対する**電話診療**のほか**往診、訪問看護**などの**体制の強化**を進める。

無症状・軽症

酸素投与の必要がない患者

※医師が必要と判断した場合は、入院

重点医療機関等

機能分化（要介護、透析、妊婦・小児等）を進めることで、**役割分担**を明確化し、**医療機関の負担軽減**につなげる。

中等症

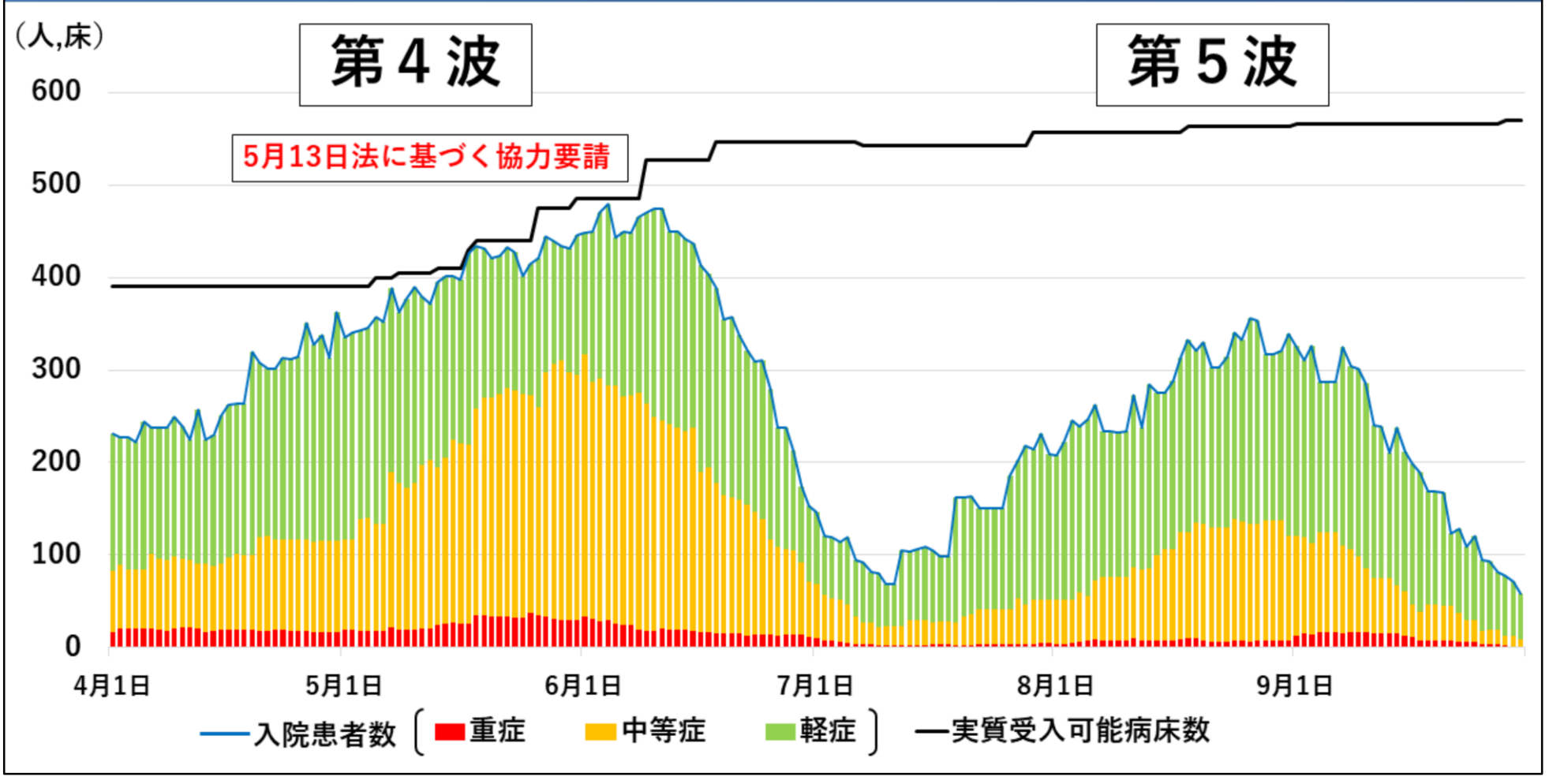
酸素投与が必要な患者
（人工呼吸器・ECMO以外）

重症

酸素投与が必要な患者
（人工呼吸器・ECMO）

○第５波では、ワクチン接種の効果などにより、入院患者の低年齢化が進んでおり、従来の重症化した高齢者への対応からワクチン未接種の比較的若い世代の対策へとシフトが求められていた。
○そこで、第５波における医療提供体制の方向性としては、無症状や軽症の患者については、自宅療養や宿泊療養を基本とし、電話診療、往診、訪問看護の体制を強化してきた。
○また、中等症、重症の患者については、受入が可能な体制を整えるとともに、透析、妊婦などの機能分化を進めることで、役割分担を明確化し、効率的な病床の活用を進め、医療機関の負担軽減につなげていくこととした。

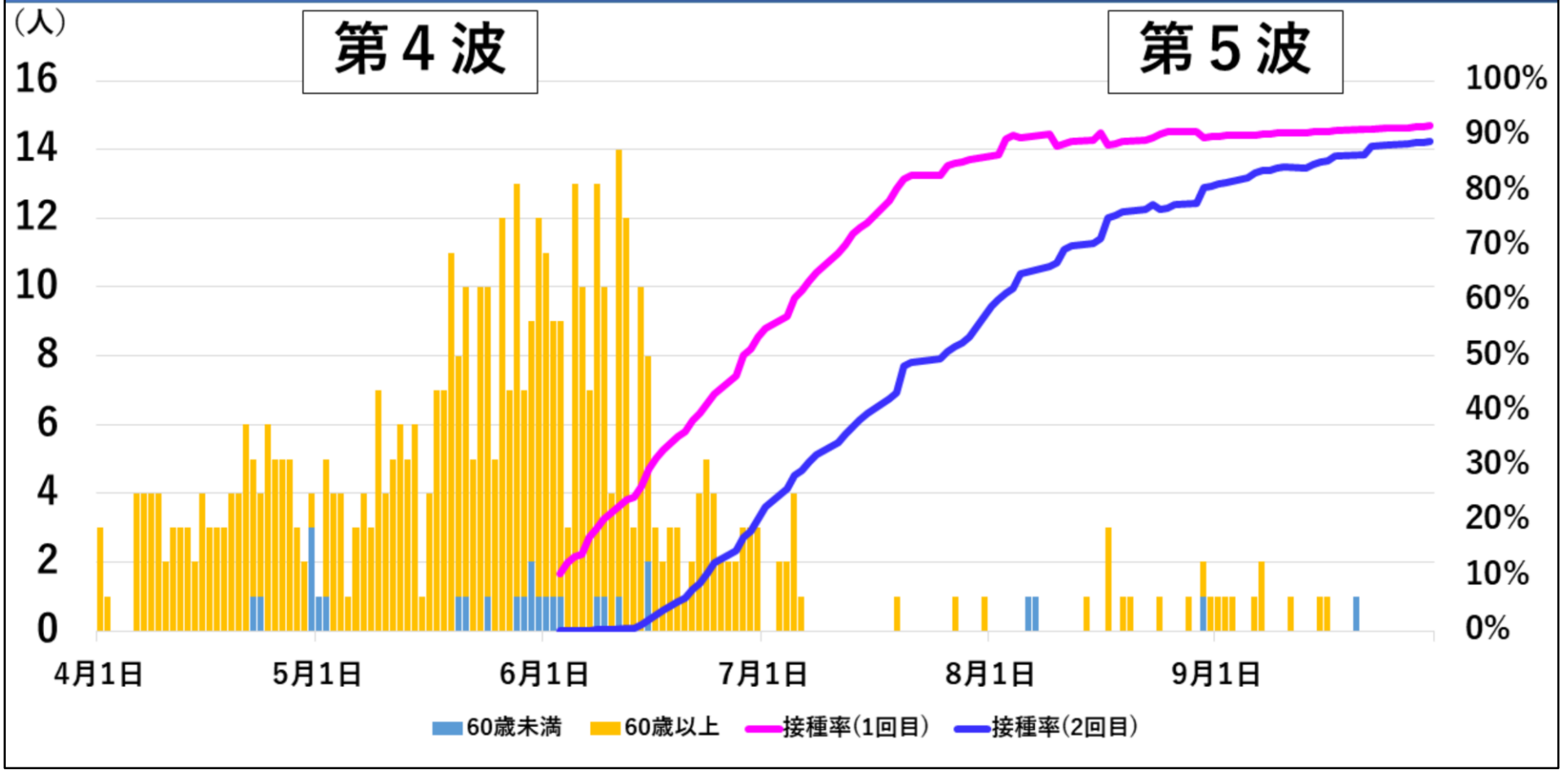
入院患者数と実質受入可能病床数の推移



○第４波では、すぐに入院できず自宅待機となる患者が発生したため、5月13日に市内医療機関に対し、感染症法に基づく協力要請などを行い、多くの医療機関からの協力を得て、入院受入病床の拡充を図った。

○第５波では、第４波の教訓や経験を踏まえ、入院受入病床の拡充と併せて、電話診療と往診の体制強化、入院の一時待機施設である「第２入院待機ステーション」を効果的に運用するなど、医療提供体制を強化することで、なんとか乗り越えることができた。

年代別の死亡者と高齢者のワクチン接種率



〇第４波と比べると第５波では、死亡者数が格段に減少している。
〇また、亡くなられた方々のほとんどが、ワクチン未接種の方々であることが分かっている。
〇こうしたことからも、ワクチン接種は重症化予防および、死亡リスクの低減に効果があることが見て取れ、
　今後の感染の再拡大やそれに伴う医療体制のひっ迫を抑えるためには、より一層、ワクチン接種を進めていく必要があると考えている。
〇引き続き、医療機関と連携し、ワクチン接種の推進とあわせて、抗体カクテル療法の活用を進め、重症化を防ぐ取組を行っていく。